

〔図書館雑誌〕一九七一年一月号より

付 驚異的な街の図書館 「マツノ読書会」を現地に見る

編集委員長 浪江 虔（私立鶴川図書館長）

編集委員 稲村徹元（国立国会図書館）

同 多田二郎（東京経済大学図書館）



長く続けていた貸本の仕事がピークをやや過ぎたころ、浪江虔氏
ご一行が視察に来られた。

同業者の見学やマスコミの取材は毎度のことであるが、学者先生
の視察は初めてであった。浪江氏が実際のお年よりずいぶんお若く
見えるのにびっくりしたのを、昨日のことのように思いだす。

夕方から夜にかけて熱心に見学され、翌朝にはもうほとんど原稿
ができていたのにも驚いた。学者というものはすごいなと思った。

紹介して下さった、東京の貸本屋大竹文庫の大竹正春氏には、今
も感謝している。



父・勇と女子従業員たち、(右)松村久

はじめに

月々二万冊の貸出し実績をもつ貸本店がある。山口県徳山市の「マツノ読書会」である。以下は三人の編集委員の実地見聞記であるが、訪れたのは全国図書館大会が終わった直後十一月十三日である。

マツノ読書会については、経営者の松村久氏自身を書いたものがある。「読書科学」四十五年三月号所載の「新しい貸本店の経営」マツノ読書会の事例」がそれである。この原稿は発表の一年前に書かれたもので、少し古いが、そこに載っているデータは今もあまり変わってはいないようである。したがって今回の報告が、前記の記事と一部重複することについては、あらかじめ断わりしておく。

この報告書は三人の合作であるが、執筆には主として浪江があたった。写真は稲村の撮影である。

なおこの小論では「本」とは週刊誌などまで含めたもの、「書籍」とは雑誌とマンガを除いたものという使いわけをすることにした。

山口県の瀬戸内海側は、東端の岩国から西端の下関まで、中小の工業都市がほとんど連なっている。岩国・柳井・光・下松・徳山・防府・宇部・小野田・下関である。徳山は出光石油を中心とする石油コンビナートの町で、人口は十万人、大学は短大もなく、高等学校は県立普通高校・私立同・県立商業・同工業の四校がある。

映画斜陽時代の今も映画館は七館あり、ボーリング場も三つある。パチンコ屋・飲食店・バーなども「十分に」整っている。人々が読書に熱心になるには、かなり不向きな条件だといっているだろう。こういう土地で年間二十五万冊の貸出しをし、そのために三五〇万円ほどの購入をしている貸本店（おそらく日本中で最も活発な）があるのは、驚異的である。

もちろん本の質は高くない。一口でいえば軽読書である。だがそういう「読書」が、駁々と全国的に広がっている以上、「買う値の数分の一で読める」貸本店があるのは当然で、読書の質が高くないことそのことは、少なくともマツノ読書会の責任ではない。なお松村氏は後述のように、もつとマシな読書をさせる努力も払っている。マンガや週刊誌が相当高い比率を占めているのは事実だが、それにこだわってこの仕事を軽く見るようなことは、ぜひしないでいただきたい。これは実地見聞に参加できなかった委員もふくめて、編集委員全員の強い要望である。



一 店はスマート、本はきれい

マツノ読書会の店は、山陽本線徳山駅と駅前バスターミナルから、約一五〇メートルという至便の地にある。駅前から、鉄道とわずか離れてほぼ並行に延びる銀座通り（銀座は正式町名）がある。その最初の角を右折して二軒目というのも、絶好の条件である。

間口三間奥行五間、一階が貸本部・二階が父君経営するところの古本部と和室の客間である。これは隔週木曜日の夜に必ず開かれる読書グループ「つれづれの会」の会場にもなる。この部屋のさらに奥に小さい「作業場」があるが、ここですべての本にビニールカバーがかけられる。

貸本屋というと、うす汚れすり切れた本や老人の店番などを思い浮かべるが、マツノ読書会はまるでちがう。合計一、〇〇〇ワットをこえる蛍光灯から光線があふれ出して、道行く人の足を止める。本のきれいさはほとんど小売書店の水準である。それもそのはず、週刊誌にいたるまですべてビニールで覆ってある。店内いたるところに読書欲をそそるみごとなディスプレイやイラストレーションがあり、本棚の配置から本の置き方にまで細か

く神経がゆき届いている。音楽が静かに店内に流れる。若くて愛想のいい女子店員がユニホーム姿でキビキビと動く。返却された本はこの人たちの手で直ちに書棚に戻る。店に常時ある本の総数が六、五〇〇冊、一日に平均七〇〇冊の貸出しがあるのだから、返された本を積んでおくわけにはいかないのだ。



五〇メートル離れたところにある書店から、マツノ読書会はその購入額の約九割を仕入れているが、新刊書はこの書店の店頭に出た当日か翌日には、早くもマツノの店に出る。本によつては同じものを二〇冊もそろえている。ま新しい書籍でも一週間二〇円から七〇円でも借りられる。二〇円というのは文庫本やコバルトブックスである。六〇〜七〇円の口は、翌々日まで返せば二〇円の割戻しがある。週刊誌でも月

刊誌でも、最新号がどんどん借りられる。週刊誌一冊の定価で四冊読める。週刊誌は翌日返して一五〇円だからだ。平日は午前十時から午後八時三〇分まで、日曜は正午から七時三〇分まで開いている。

これだけ条件が整ってれば、利用しない方がどうかしている。夕方は高校生たちのラッシュで店の中はごった返す。下校時の解放感もあるうが、嬉々として本選びをしているのは、全く標準的な現代の若者であって、いわゆる読書家づらをしてはいない。しかし本を捜す目つきは真剣である。借りて帰ってアテ外れだったら借り賃を損するわけだから、ウカツな選択はできないのである。

二 データいろいろ

まず貸出しの実績をみよう。

四十五年一月から十月までの、月別・種類別貸出し実数は第一表のとおりである。合わせて各月の貸本料収入と仕入れ高とを載せておく。貸出冊数といい、買入れ金額といい、全く大したものである。年間の数字は、このおよそ二割増しであろうから、二四〇二五万冊、三五〇万円近いことになる。

経費の主なものを、四十五年十月でみると、次のとおりである。(単位千円、百位四捨五入)
利用者の年齢と性は、つぎのようである。(これは『読書科学』掲載のをそのまま転載)

月	書籍	月刊誌	週刊誌	マンガ	計	対前年	貸料	仕入れ
1	5,012	4,245	4,148	5,963	19,368	115	709	265
2	5,165	3,723	4,356	6,265	19,500	112	661	281
3	5,662	4,532	4,305	6,331	20,830	114	760	294
4	5,179	3,943	4,206	5,206	18,534	109	699	355
5	5,235	4,222	3,970	4,887	18,314	105	700	307
6	5,634	4,055	3,987	5,341	19,017	102	657	249
7	5,965	4,285	4,040	6,176	20,466	100	708	247
8	6,512	4,422	4,176	7,751	22,861	101	832	250
9	6,698	4,335	4,482	6,725	22,240	101	854	253
10	6,093	4,143	4,324	6,215	20,775	108	782	257
計	57,155	41,905	41,994	60,851	201,905	—	7,362	2,758

給料	293	家賃	131
仕入れ	257	貸出促進費	56
広告費	44	その他とも計	639
福利厚生費	31	(給料中には松村氏や夫人の分もふくまれているその額ははなはだつましい)(単位千円)	

年齢	男性	女性	計
～15	8.7	7.7	16.4
16～20	18.2	28.5	41.3
21～25	6.9	13.3	20.2
26～30	5.7	3.4	9.1
31～35	3.4	1.6	5.0
36～40	1.7	1.3	3.0
41～	3.5	1.5	5.0
計	42.7	57.3	100.0

〇〇部とのことである。

これに毎号「今週の貸出しベスト一〇」が大きく書き文字体で載っている。六月号（前月半ば過

よく出る週刊誌

1970.4.現在

順位	誌名	児童・学生部		順位	誌名	成人部	
		現在	1年前			現在	1年前
1	マーガレット	15	8	9	少女コミック	7	0
2	セブンティーン	14	5	10	少年ジャンプ	6	0
3	少女フレンド	13	7	11	ビッグコミック	6	3
4	ファニー	12	0	12	少年マガジン	5	3
5	女性セブン	12	18	13	プレイコミック	5	3
6	女性自身	11	18	14	週刊明星	5	7
7	ヤングレディ	9	18	15	週刊平凡	5	7
8	週刊女性	8	16				

(注：雑誌に「マーガレットは雑誌は、週刊」と記されている。

各誌とも右端の数字が44年5月の毎号の購入部数、その左隣は45年5月の購入部数である

(機関誌ランペル5月号掲載)

これは昭和四十三年六月から十二月までに、一回以上本を借りた人、四、八六五人の内訳である。もちろん延数ではないから、来店の頻度の高いティーンエイジャーが、この数字に示されたよりもっと大きな比率でここを利用している。二五歳までの人が九五%を占めるだろうと松村氏はいう。

上記のデータは少し古いが、よく出る週刊誌についての上の表を参考にすると、利用者層の推移がある程度推測できる。

機関誌「ランペル」はA6判四く六ページのかわいいものだが、巧みに編集されて、重要な役目を果たしている。断片的な小記事の中に、松村氏の利用者へのアピールが織りこまれてもいるし、会員相互のコミュニケーションの場にもなっている。発行部数は四、〇

ぎの週の実績) から九月号までは「誰のために愛するか」が連続トップであった。十月号では三位、十一月号では五位と落ちるが、『芝校』が十月号で四位、十一月号でトップに立っている。

十月号では『戦争と人間』が第一位であった。この本を読ませようという努力が払われた。翌日返し二〇円という特別料金にしたし、映画をすいせんもしたのである。「ランペル」では毎号、市内七映画館のプログラムを紹介し、「すいせん」「準すいせん」をマークしている。『戦争と人間』は十月三日から三週間上映されたが、十月十五日には「つれづれの会」で映画の方を話題に取り上げている。(後述)

これだけやっても十一月号のベスト一〇では姿を消してしまった。マツノ読書会の『大衆』にとつては、あれはやはり堅すぎるのであるろう。

この『大衆』の読書傾向については、「ランペル」でたびたび取り上げられている。その一つ二つを引用しておこう。

まず六月号の「マツノ横丁」欄のもの。

「読書」はダメ?

マツノでは、昨年五月から「三一高校生新書」を一〇〇冊あまり無料貸出しています。一年をふり返ってみると、やはりよく出ているのは小説類で、一年間に一冊平均二五回、それに対しノンフィクションは六回しか出ていません。

いちばんよく出た『若い愛の流れ』の三七回をはじめベスト一〇はすべて長編小説で占められ、その題にも「愛」「青春」という字が目立ちます。

逆に一度も出なかったのは「ことばと文章」。概して、授業の延長のようなものや、思想、芸術、読書などをあつかった本は不評です。

それにしても『読書と人生』や『若き日の読書』の貸出が年間にたった一回とは、マツノ読書会の看板にいつわりあり…でしょうか？

「無料貸出し」のことについて考えさせられるところがあった。松村氏は読ませたい書籍数百冊を一週間無料で貸す部に入れている。その中に岩波の少年文庫や福音館の絵本もあるし、新潮社の日本文学全集や立原道造全集も入れてあった。しかし無料だからよく借りられるということには、どうもならないらしい。現代の若者たちは三〇円〜五〇円の金があるいらぬには、そこだわらない、タグだからといって面白くもない本を読むことはないというのであろうか。

十一月号の「マツノ横丁」も興味深いデータをあげている。この前半は、図書館に対しての痛烈な皮肉でもある。

マンガと活字

図書館でいつも貸出のトップを占めている『日本の歴史』などの教育マンガは、マツノのマンガの中では、とびきり出ないものばかり。

鳥なき里のこうもり。つまり、どんなにへんなマンガでも、活字の本にくらべれば、魅力バツグンなのかネエ。

『巨人の星』や『男の条件』はマンガと小説の両方あるが、貸出の比率は、マンガ九八対小説二の割合だよ。

公害への無関心度？

ベストセラー『誰のために愛するか』をマツノでこれまでに借りた人は六〇〇人以上。それに対し、公害の基本図書ともいうべき、R・カーソン著『生と死の妙薬』（原題『沈黙の春』新潮社）や都留重人編『現代資本主義と公害』（岩波書店）を借りた人はたった一人ずつとは……グヤジイ！

利用者の数は、七月一日以降の登録で十一月五日に四千人を越えた。ここでは八カ月ごとに登録がえをしているのだが、前回つまり四十四年十月からの時は、四千人に達するのに五カ月かかり、今回は四カ月であった。二月までには六千人程度になるだろうという。

交通至便の地にあるせいか、登録者の多くが列車やバスの利用者で、半径五〇〇メートル以内の居住者は、一〇％見当だそうである。このことは図書館の将来計画を考える上でもかなりだいじなことではないだろうか。図書館（分館・配本所・駐車場も含めて）は密度を高くしなければという原則はあくまでも正しいだろうが、人々の日々の動線を無視した机上プランでは、密度を高めても

それだけの効果はあがるまいと思う。

三 実務の処理

初めに述べたように、この店の本はすべてビニールカバーがかけてある。二階の「製本室」では手早くこの仕事が行なわれているが、かけたビニールが縮んで表紙を曲げることのないように、夏と冬とでは厚さのちがうのを使い、また所定の大きさに切ったものをしばらく置いて縮むだけ縮ますこともやっている。週刊誌のように立てると本が曲がってくるものは、表紙の裏の小口のところに二センチ幅ぐらいの厚紙をはりつけ、それごとビニールカバーで覆っている。

貸出しの盛んな公立図書館では、近頃、汚れと痛みを防ぐ目的でブックカバーをそっくりかけるようになった。しかしこれはかなり高くつくし、一旦はりつけたらはがすことは全く不可能である。マツノ方式は一冊三円ぐらいの材料費だから、コストのケタがちがう。かける手ぎわもあざやかで、早業といつてよい。なおここでは三〇回貸出されると、はりつけた貸出票（後述）が一杯になるが、そうなると天地と小口を裁断することになっている。ビニールカバーはこの時、ごくかたんに取りかえられる。ブックカバーではこのまねはできない。

本をだいじにする点で感心したのは、閉店のときのやり方である。八時半の閉店だから早くはない時間である。その閉店にあたって傾斜している雑誌棚に並べてあった雑誌を全部とり出して、背

と小口を交互に組み合わせ、いくつもの「山」をつくるのである。こうして朝までおくと、かなりシヤンとするとのことだ。馴れた手つきです早くやっており、時間からいえば大したことはないが、これを毎晩やるその心がけは、全く見上げたものである。

わずかの人手（実質ほぼ三人の労力）で、前述のような貸出し実績を打ち出しているのだが、本をきれいに保つためにはこれだけの努力を払っている。手を抜けるところは思い切つて抜くが、必要などころには労を惜しまないのである。

本の配列は全く利用者本位である。店内数カ所に「本のおきばは遠慮なく従業員にお聞き下さい」と掲示してはあるが、なにしろたいへんな混みようだし、大体利用者の多くはそれを聞くのが好きではない。だからなるべく誰もが望みの本を見つけ出しやすいように配列するのが、当然ながらこの店の方針である。

棚には作家の名前を書きこんだ幅二センチ長さ一〇センチぐらいの紙片をはりつけてある。もちろんこれは、相当の冊数がある作家に限られる。その分を列挙することも無意味ではないだろう。（行かえがしてないのは、その分が一旦とまりになっていることを示す）

○松本清張（二カ所）、北杜夫、五木寛之、福永武彦、立原正秋、水上勉、芹沢光治良、井上靖、遠藤周作、富島健夫、黒岩重吾、石原慎太郎、石坂洋次郎、山本周五郎、なだいなだ、石川達三、清水一行、源氏鶏太、三島由紀夫。

○八切止夫、池波正太郎、吉川英治、山手樹一郎（二カ所）司馬遼太郎、柴田鍊三郎（三カ所）早乙女貢。

○大藪春彦（二カ所）、笹沢左保、高木彬光、梶山季之（三カ所）、島田一男、佐賀潜、邦光史郎、佐野洋、城戸礼、川上宗薫、陳舜臣。

○瀬戸内晴美、曾野綾子、森村桂、花登筐、倉橋由美子、佐藤愛子、三浦綾子、有吉佐和子。

なお作家名を記したのと同大の紙で、本の種類を示しているものもある。

税金でまかなわれている公立図書館とちがって、税金をとられながらやっている貸本店なのだが、入会（登録）はいたって簡単に受けつける。山口県内に在住または通勤していることがわかりさえすればいいのである。入会金はわずかに五〇円、これで定期券スタイルの会員証が渡される。しかもこれは家族なら共通に使える。会員は同時に一〇冊まで借りることができるが、実際は平均二冊である。有料だから余分に借りることをしないのだ。しかし借りたければ一〇冊までは借りられるようにしてあるのは注目に価する。無料貸出しの本も数百冊置いてあるのだから、悪用する気にならばできるわけだが、お客を疑うよりは信用してかかるという態度のあらわれであろう。

貸出し料は、この店の運営の一切を支えているものだが、利用者からみると案外安い。前述のように一部無料サービスがあるが、それは別として書籍の最低が一週間二〇円（文庫本とコバルトブックス）。その上が三〇円、四〇円、六〇円、七〇円とある。六〇・七〇円のは翌々日までに返せば

きりぬき
らくがき > すぐお申出ください。

マツノでは皆様楽しくお読み頂くため、貸出のつど厳重に調べて完全なものを店に出すようにしていますが、万一「きりぬき」や「らくがき」を発見されたばあいは、すぐお申出くださいませ。また「又貸し」は事故のもとですから、固く断わりいたします

マツノ読書会

帳簿の各ページは縦横二本の線を引いて九区画にわけであり、それにより一から九までのナンバーが与えられている。これが区分けの数字である。したがってこの貸出し票に記入される数字は、日付が二ケタのときは三字、三ケタのときは四字、それ以上にはならない。返された本のこの票を店員が見て、帳簿の該当ページの記載箇所をみつけ出し抹消するのは実に早い。

帳簿の方は、会員番号と本の番号と、本の種類別符合とを記入するのだから、字数が少し多くなるが、週刊誌などは会員番号と符合だけで済ませている。日数と料金との関係が前記のようなので、こうしたやり方が恐らく最も能率的なであろうが、実に巧みに考えられたものである。

日延べ料は割高なので、返しおくれが長くなるとトラブルも起きる。それで、一週間期限のものは一〇日目ぐらいに早々と催促状を出す。私製ハガキに、漫画入りでいいねいな催促文が刷ってあり、貸出月日と書名とを記入する欄がある。催促する相手と本とは、ともに貸出簿に記載された番号からたぐるわけであるが、しかし催促が必要になる数は、貸出し総数に比べればごくわずかだ

から、貸出しに際して人名書名を数字ですましているのは、賢明である。

切りぬきと落書きの防止策は、会員の協力をうまく引き出す方法でやっている。つまり発見者に申告してもらおうのである。「切りぬきや落書きは、定価の倍額の弁償です」と利用案内のチラシにあるが、どの本にも三×六センチの黄色の紙片がはってあり、そこにこう書いてある。

「貸出しのつど嚴重に調べる」時間的余裕はなさそうだが、悪徳漢の次の読者が検査者になつてくれるわけである。もちろん「犯人」をつかまえて定価の倍の弁償をさせるのが目的ではなく、予防策である。

店が物理的にも心理的にも実に明るく、本がとてもきれいだということに、三人ともすっかり感心してしまったわけだが、その原因はこれまで述べたことその他にもある。それは思い切った廃棄である。月々二五〜三〇万円の本を買いながら、店の本はふやさないのだから、買っただけの量を処分していることになる。雑誌の多くはもちろん古紙として売ってしまう。書籍の方は毎月一回、貸出票を調べて検印を押し、二カ月間一度も出なかつたのは売ることになっている。もちろんこの他にも店主の判断で売るのがたくさんある。本としての商品価値の残っているものは、二階の古本部にまわされる。

つれづれ便り

読者グループつれづれの会 5月6日はゲストに若者の松下一氏をお招きしました。出席ご希望の方は前もってご連絡ください。

はぶ「タスケテグダシ」(ドリーム97)の金重剛二氏も参加の予定です。

5 (木) 『敏びの四季』 (上下巻 1巻目 1巻目)

5 (木) 『墮落論』 (原口安生 高川正雄)

つれづれの会
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
TEL. 21-2192

四 いくつかの文化活動

マツノ読書会は、貸本だけやっているのでない。発足以来十二年の読書グループ「つれづれの会」があるし、月刊機関誌ランペルがある。現代詩や読書感想文の懸賞募集もやっている。これらについても、簡単にふれておこう。

つれづれの会は隔週木曜日・二階の和室で開かれる。話題とする本は、早目に発表する。参加は自由なので、小さくかたまつたグループがあるわけではないが、常連もいる。参加費の五〇円はお茶菓子代にも足りない。

一〇月以降の本を列挙すると次のとおりである。

一〇月 一日 『生ける人形の告発〜水俣病十五年の記録』(首藤留夫)
一五日 (映画の) 『戦争と人間』(地元映画館で上映開始一三日目)

二九日 『天の夕顔』(中河与一)

一一月 二日 『風に吹かれて』(五木寛之)

二六日 『白鯨』(メルヴィル・阿部知二訳)

一二月 一〇日 『スポーツ亡国論』(牛島秀彦)

なお、白鯨をとりあげた日には九州産業大学の丸田明生氏をゲストとして招いている。時々そういうことをやっている。こ

の会は型にはまつた読書会というよりは、本を重要な話題のひとつにした話し合いの会のようである。

詩の募集はすでに九回を重ねている。これまでの第一席作品は、階段途中の壁面にはり出してある。九回目は内容規定が「愛の十四行詩^{ソネット}」である。駱駝詩社の後援を得て、その主宰者が選者、入選作の発表は「ランペル」と「駱駝」、賞は一席三、〇〇〇円（一人）二席一、〇〇〇円（二人）佳作五〇〇円（八人）で、みな図書券である。

読書感想文の去年（四十五年）の分は、朝日新聞徳山支局の後援を得て八月に行なった。本は下記の五冊、選者は広島大学教授松元寛氏、一等一人一〇、〇〇〇万円、二等一人三、〇〇〇円、佳作八人五〇〇円、発表は朝日新聞紙上である。

曾野綾子 『誰のために愛するか』

庄司 薫 『赤頭巾ちゃん気をつけて』

金重剛二 『タスケテクダサイ』

クロニン・竹内道之助 『青春の生き方』

丸岡忠雄・真原牧 『詩集 部落』

利用者を対象としたアンケートは、たびたびやっている。最近のは、四十五年の読書週間記念で実施した第二〇回のものでマンガ家と小説家の人気投票であった。回答者は性別年齢職業だけしか

わからないようにしてあるが、先着一、〇〇〇名に「特製ビニール袋」（本を入れる）をサービスする。気は心で、このアンケートはいつもよく集まるのである。

書くことは次のとおりである。

あなたの好きなマンガ家を三人書いて下さい

あなたの好きな小説家を三人書いて下さい

最近おもしろかったマンガを書いて下さい

最近おもしろかった小説を書いて下さい

マンガ家およびマンガ出版社に望むこと

（この原稿執筆中には、まだこの結果はわからない）

回答者に対するサービスで、「特製ビニール袋」とあったが、紙の本入れ袋は気のきいたデザインのもので七種類ほど作ってある。無料ではないが、本を借りているうちに手に入るようなくみになっていく。徳山の町では、この袋を小わきに抱えて歩くのが、ちょっとしたアクセサリーになっているらしい。

以上のような文化事業が、忙しい貸本業務の傍で行なわれている。それはおそらく、貸本業では否応なしに利用者の要求をのまされるので、それだけに満足できない松村氏の悲願のあらわれであろう。今度の調査では、この側面での成果を検討することなど、とてもできなかったけれど、徳山

市の中で、一定の文化的役割を果たしていることは疑う余地はない。

五 公立図書館とはどうかかわりあうか

マツノ読書会の存在とその業績は、第一線の公共図書館に働く者にとって、多くの教訓に満ちている。いや公共図書館ばかりではない。充実した大学図書館で働いている多田委員までがマツノ読書会をみて、大学図書館の現在のあり方について、痛切に考えさせられたという。学生が強くひき

図書館名	人口 (千人)	職員	蔵書 (千冊)	開架 (千冊)	年間受入 (冊)	登録者	個人貸出 (千冊)	44年資料費 (万円)	人口1人当り 貸出(冊)資料費(円)	
市立柳井	40	2	14	9	780	683	33	55	0.8	13.7
市立小野田 (一分館とも)	41	9	35	18	1392	1428	26	63	0.6	15.4
光市立	44	3	22	5	1493	698	18	109	0.4	24.8
下松市立	48	9	25	10	1899	2800	64	82	1.3	17.1
市立防府	99	7	43	13	2826	1409	15	193	0.1	19.3
徳山市立	100	9	37	15	3488	2808	53	430	0.5	43.0
市立岩国	105	7	58	11	1603	1877	51	160	0.5	15.2
宇市立	148	14	71	58	3734	1489	13	205	0.1	13.9
市立新下関 (2館計)	274	16	101	13	2835	1231	21	640	0.2	23.4

	人口 7~10万	徳山市立	人口 10~20万	注
職員数	5	9	8	
蔵書冊数	30619	37086	37086	(全く同数)
図書購入冊数	873	3488	1302	徳山のは受 入冊数
個人貸出登録者	1130	2808	1661	
個人貸出冊数	509	3389	21213	
資料費決算額	1224	2304	1747	43年度

つけられるような、つまり新刊書がすぐ棚に並べられて、そこから気軽に借り出せるような大学図書館のあり方を追究する必要がある、"無用の用" などとお高くとまっていられる時期はすぎたというのが多田委員の結論だったようである。

ところで図書館関係者がおそらく疑問を抱くのは、この地の公立図書館はいつたようなのか、ということであろう。今回は日程の関係で訪問できなかったのが、"日本の図書館"のデータで少し検討してみよう。

最初に列挙した山口県南部の九市は、みな市立図書館をもっている。それを日本の図書館一九六九年で比較してみると、前頁のような数字になる。

一見して明らかのように徳山市立は各事項について"良"の部に属する。

もう一つ、「日本の図書館一九六九年」から、人口七〇万と一〇〇万の市の図書館の中間数をとって徳山市立と比べてみる。

この方では徳山は疑いもなくすべての中間数を超過している。しか

も人口一〇〇二〇万の都市のそれを越えている。

以上二つのデータから、どうしても次のような結論をひき出さざるを得ない。

マツノ読書会の前述のようなすばらしい実績は、今の日本の公立図書館の「良」的程度の活動では、それとは無関係に挙げられているということである。つまり平均的または「良」的公立図書館があるどこの市でも、もし松村久氏のようなセンスと情熱の人が現われて貸本屋をやれば、図書館の存在は一向営業上の障害にはならないのである。一方は税金に支えられて無料貸出しをしている。他方は一日いくらという利用料をとることで一家族と小人数の従業員の生活を支え、若干の税金も負担しながらやっている。そしてそれが「平和共存」できるのである。図書館活動がくまなく行きわたって、貸本業が成り立ちそうもない市区町村は、今の日本ではたぐい稀といわざるをえない。

日本の公立図書館は、図書館を利用しない人たちを、おこがましくも「不読書層」などと呼び、その開拓を天命でもあるかのように思い上がる一方、本気で魅力あふれる図書館づくりをすることをなほだしく怠ってきた。マツノ読書会の存在と実績をみて、深刻な反省をしない図書館人は、よほど感度の鈍い人にちがいない。

(今回の転載にあたって写真をさしかえました)

つれづれの会
ごあんない

- ..と き ..月2回、木曜
午後7時~10時
- ..と ころ ..マツノ階上
- ..か い ひ ..1人 50円

まじめな問題を『遊び』の
精神で話しあう楽しい集い—
これが読書グループつれづれの会
です。平均年齢は男25才、女
21才。高校
生以上どな
たでも歓迎
いたします。



◀1968年テキスト一覧▶

数	月/日	テ キ ス ト	著 者	出 席 者 数	会 費 額	会 員 数
1	1/11	風景との対話	東山 魁夷	3	7	10
2	1/25	踏まれ石の返書	むの たけじ	6	8	14
3	2/8	負しき人々	ドストエフスキ	4	6	10
4	2/22	森の生活	ソーロー	5	4	9
5	3/7	我が心は石にあらす	高橋 知巳	6	7	13
6	3/26	美しき薔いの年	カロツサ	4	5	9
7	4/11	あらくれ	徳田 秋声	5	8	13
8	4/25	草の花	福永 武彦	5	8	13
9	5/9	荒野の呼び声	ロンドン	5	7	12
10	5/23	ファウスト(第1部)	ゲーテ	7	7	14
11	6/6	銀の匙	中 勤助	3	6	9
12	6/20	1968年	心の、岡村	7	7	14
13	7/4	異邦人	カミユ	10	5	15
14	7/18	いのちの初夜	北条 民雄	11	8	19
15	8/1	郷	ヘッセ	5	9	14
16	8/15	日本語とどういふ言語か	三浦 つとむ	11	5	16
17	8/29	オセロ	シェイクスピア	8	6	14
18	9/20	市民ケーン	(映画)	6	4	10
19	9/26	ロミオとジュリエット	シェイクスピア	3	6	9
20	10/10	三四郎	夏目 漱石	5	6	11
21	10/24	オー・ヘンリー短篇集	オー・ヘンリー	5	2	7
22	11/7	雷	川端 康成	5	10	15
23	11/21	学徒出陣	安田 武	9	4	13
24	12/5	海からの贈物	リンドバーク夫人	2	9	11
25	12/12	トニオ・グレーゲル	トーマスマン	4	7	11

本を読んで考えないのは
食べて消化しないと
同じである。E-パーク

つれづれの会

徳山市銀座 マツノ読書会内
TEL 21-2195

資料1 28年続いた読書グループ「つれづれの会」の案内パンフ

ランベル

発行
マツノ読書会
徳山市銀座
TEL 21-2195

あわれ

鳥居栄子

空のたかみにまなこ閉じ
心めしいているときも
花のかおりはゆらゆらと
かいなをぬけて去るのです。
風はかおりをすいながら
愛をくゆらせ去るのです。
野にあかあかと花あかり
固くとぎしている堂手より
ほろほろこぼれて水に降り
時を移してゆくのです。
花のいのちのあわれとも
時は語らずゆくのです。
風にのりまた蝶を追
ふたたびま遠くゆくのです。

(「愛のソネット」第二席入選作品)



資料2 マツノ読書会機関紙「ランベル」より。(原寸 2色刷)